

CURES

NEWSLETTER

地域経済 ニュースレター

1992.5.20 No.23

巻頭言

環日本海時代の学術交流

橋本哲哉

この数年、環日本海地域間の交流が急速にすすみ、その影響は大学、学術面にも着実に及んできている。本クレス誌はその様子を機会を選んで報告してきたが、経済学部が最近の1年間に関わったところの、環日本海学術交流の実績を以下述べておきたい。

まず、経済学部の正式のスタッフとして、ロシア・ウラジオストクの極東国立総合大学東洋学部のアンドレイ・グラドチェンコフ氏を迎えていることを紹介する。1992年1月から1年間の予定で来日されたが、氏は日本金融史と現代中小企業問題を研究テーマとして、主に研究を中心とした大学での生活を続けて

いる。日本語の会話はまだ少し不自由であるが、日本語文献の読解力はすばらしい。先生の研究室を訪問する度に、何かしら新しい本が増加しており、その真面目な勉強ぶりに圧倒される感じである。さらに本誌に掲載された「ロシア金融制度の危機と資金調達問題」なるテーマの論文を執筆したところである。

われわれの立場で考えると、1年間の外国留学期間の半ばも過ぎぬうちに、現地の言語で論文を書き、現地で発表するという事は、かなりの勇気を必要とする。来日4か月目といえば、慣れぬ土地での食生活をはじめとした生活習慣に、どうにか順応した頃といって

- 巻頭言 橋本哲哉
- CURES Report
「ロシア金融制度の危機と資金調達問題」..... アンドレイ・グラドチェンコフ
- CURES Salon
「興味深いカナダ社会」..... 海野八尋
- Topic
「石川で開かれる『地球サミット』」..... 碓山洋
- 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

よい。グランドチェンコフ先生の学者としての真摯な活動ぶりを示す例といって差し支えない。

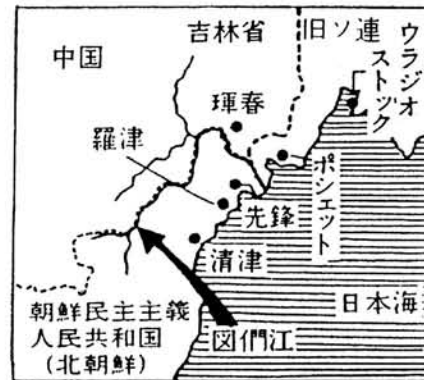
彼の前任者として、経済学部は中国研究者の凌星光先生を今春まで2年間お迎えしていた。また、アメリカとハンガリーの研究者も1年間ずつではあるが、今年度採用を予定している。環日本海交流を起点として、より広い学術の国際交流も企図している次第である。

同じウラジオストクの極東総合大学から、4人のロシア留学生を経済学部は受け入れてもいる。金沢大学の留学生は1989年からうなぎのぼりに増加し、総勢150名を越えるといった現状にある。そのうち約2割は経済学部にも所属している（ちなみに、金沢大学における経済学部のスタッフの割合は消費税並の3%程度である）。留学生の約半数は中国からやって来ており、しかもその大半は私費滞在中で、苦しい経済状態のなかで懸命に勉強している。3%のスタッフが、20%の留学生を指導しているわけであるが、日本経済とあいまって、彼らの期待が経済学部にある程度集中するのはやむをえないと受け止めている。

さて、ロシア留学生であるが、彼らは文部省が毎年募集する日本語日本文化研修留学生制度に、経済学部が初めて応募させた学生たちである。4人とも国費の留学生として認められ、昨年10月から1年間の契約で来学し勉強している。その経緯については別のところで詳しく述べたので、ここでは割愛する（拙稿「4人の国費留学生の受け入れをめぐる」金沢大学留学生センター『紀要』創刊号、1992年7月刊予定所収）。ひとことで言えば、この間のウラジオストクをはじめとした対岸地域との学術交流実績があったらこそ、彼らを迎えることが可能となったと考えている。国費留学生であるので、4人には経済面での

心配はほとんどない。これは独自の財政的基盤を持たない国立大学の留学生受け入れにとって、きわめて重要な事柄である。今年度以降しばらくの間、彼らの後輩も受け入れるべく文部省に働きかけるつもりである。環日本海交流の人材養成にとって、こうした方法が時間がかかるが有効である、と期待しているからである。

経済学部のスタッフが中心となって、今2月に曹序教授（中国・吉林省東北師範大学）をお招きし、金沢で研究会を開催することもできた。曹教授は専門の経済学の分野から、最近国際的にも注目されてきている図們江開発に関して、現地の最新情報も含めて貴重な報告を披瀝された。



上図にあるように、図們江は中国・北朝鮮・ロシアの国境を流れ、その開発はとくに中国・北朝鮮の垂涎の的となりつつある（いまのところ、ロシアはウラジオストクを経済特区の中心に位置付ける関係からあまり積極的な関心を寄せていない）。日米も加わって、河口を含めた地域の情報収集は今後もおおいに注目を浴びるだろう。

以上大きな3つの交流事例を紹介したが、環日本海学術交流の中で経済学部がより多くの貢献を果たしてゆくよう、今後も努力するつもりである。

（金沢大学経済学部長）